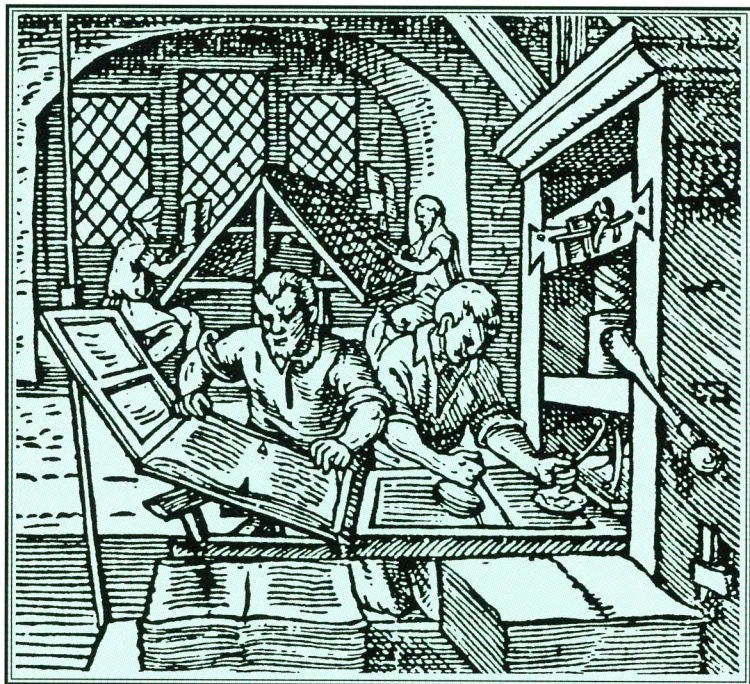


大学出版

'96 夏

No.30



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会



大学出版
30号

Summer・1996

読書の周辺 オウイデイウスと本 木村 健治 1
——流刑地トミスにて——

読書の周辺 古代人の食卓メニュー 南川 雅男 6

京都で日本出版文化史展を見る 関野 利之 11

オンライン受発注稼動一カ月を過ぎて 佐野 雄治 15

歩く・見る・聞く―知のネットワーク 4 17

大学出版部ニュース 19

新刊案内'96・4（'96・6） 27

製作の現場から 14 B 表 3

オウイデウスと本

——流刑地トミスにて——

一七八八年四月、ドイツの文豪ゲーテは二回目のローマ滞在を終わろうとしていた。最後の夜は満月で、詩人はカピトリウムの丘に登り、マールクス・アウレリウスの像を見て、それから、階段を降りてセプティミウス・セウエールの凱旋門の所へ行き、ウィア・サクラに立ち、そして大円形劇場の遺跡に向かう。そこで柵越しに中を覗き込み、「戦慄におそわれて急いで帰宅」する。ゲーテはその夜のことをこう記している——

すべて巨大なものは、崇高であると同時に理解しやす
いという、一種独特な印象を与えるものである。そして
私はこの巡回によって、いわば私のローマ滞在中の見果
てもつかぬ偉大な集計をおこなったのであった。この集
計は、興奮した心の中に深刻雄大に感知されて、英雄的
哀歌的ともいふべき気分をおこさせ、そこから詩の形式
をもって、哀歌が制作されそうに思われた。

さればこのような瞬間に、どうしてオウイデウスの

木村 健治

哀歌が私の心中に想起されなはずがあるろう。彼もまた
追放されて、ある月の夜にローマを後にしなければなら
なかつたのである。“Dum repeto noctem!”（かの夜を
思い起す時）はるかに遠い黒海の畔ほとりに、悲しみと歎き
とにみちた境遇において、オウイデウスが抱いた追懐
の情を、私は忘れることができなかった。私はその詩を
くり返して心に浮べ、そのなかのある箇所は正確に私の
記憶よみがえに蘇よみがえってきたが、それはまた私自身の詩作を惑わ
せ妨げて、後日になって試みたけれど、どうしてもそれ
はできあがらなかった。

（『イタリア紀行』相良守峯訳）

このようにして、ゲーテはローマを去るときに自分を古
代ローマの詩人に重ね合わせて、『悲しみの歌』の第一巻
第三歌の一行（四行と二七行）三〇行を引用していた。こ
の詩人オウイデウスは、紀元八年、旅先のエルバ島から
突然、ローマに呼び戻され、皇帝アウグストゥスにローマ

帝国の辺境である黒海西岸トミス（現在のルーマニアのコンスタンツァ）に追放の命令を受けた。追放の真の原因は今もって分からない永遠の謎であるが、詩人自身はその原因をただ「詩歌と過誤」と言うだけである。追放処分にあうまでのオウイディウス（プーブリウス・オウイディウス・ナーソー）は、当代随一の花形詩人であり、数々の作品を表していた。『恋の歌』、『名高き女たちの手紙』、『女性化粧品について』、『恋愛術』、『恋愛治療術』、『変身物語』、『祭暦』等がそれまでの作品であった。

詩人自身は、ローマ最後の夜のことを後にトミスで書いた『悲しみの歌』の中で次のように回顧している――

あの夜の悲しい思い出が忍び寄るとき

――私にとって都で最後の時間だった――

愛しいものの数々に別れを告げた夜を思い起こすとき、
今もなお目から涙が落ちる。

すでに夜明けが近づいていた、皇帝が私にイタリアの

国からの退去を命じていた その当日の。

準備する時間的・精神的な余裕も十分にはなく、

ぐずぐずしている内に心は麻痺してしまった。

奴隷や仲間を選ぶことも思い至らず、

流謫の身にふさわしい服や金の配慮もできなかった。

茫然自失の状態だった、ちょうどユピテルの火にうたれ
生きているのに生きているのが分からぬ者のように。

しかし悲しみ自体がこのような心の曇りを取り払い、
ついに感覚が蘇ったとき、私は去り行く

者として最後の言葉を悲しみに沈む友人に語りかける、
大勢の中からたった一人二人になった友人に。

愛しの妻は涙を流す私を涙を流しながらさらに激しく抱
きしめた、その涙の雨は汚れなき彼女の頬を伝った。

（『悲しみの歌』第一巻第三歌一〜一八）

ローマで最後の夜のことを流刑地で思い出しつつ、詩の
中でそれを再現しているのである。

こうして、他の誰にもまして「都会派」の詩人であった
オウイディウスは、トミスに赴き、皇帝にはローマ帰還の
嘆願をしつつ、詩作に励む。追放後にできた主たる作品が
『悲しみの歌』と『黒海からの手紙』なのである。もちろん
ん、作風は一変する。妻や友人にあてた書簡体の詩で詩形
はエレゲイアである。何よりもこれらの作品には詩人の率
直な思いが溢れんばかりである。

オウイディウスの流刑地であったトミスというところは
どんなところであったのか、これも、詩人の追放後の作品
を手がかりにするしかないが、ともかくも、彼にとつては
想像を絶する世界であった。詩人は自らの詩の中で次のよ
うに言っている――

この海岸にはギリシア人とゲタエ族とが混在しており
治安のよくないゲタエ族が大半を占めている。

サルマタエ族やゲタエ族の大群が

馬に乗って道を行ったり来たりしている。

その中で、矢筒と弓を持たぬ者、

蛇の胆汁の毒で薄黄色の矢を持たぬ者は皆無である。

声は荒々しく顔つきは恐ろしく、軍神マルスの姿をとり

髪を毛を切ったこともなく、髭を剃ったこともなく、

右手は小刀を突立て傷を与えるにすばやく、

蛮族は全員小刀を腰にさしている。

〔悲しみの歌〕第五卷第七歌一一―二〇

常に生命の危機に脅かされる中で、詩人にとって詩を
書き、本にすることが生きるといふことなのであった。ま
さに詩人は「詩なしでは生きていけない」〔悲しみの歌〕
五・七・三三〕状態におかれていた。

しかし私はほめられるために徹夜をしているのではなく

また、名前を将来に残すことにも関心がありません―

名前など知られぬ方がよい―

私は心を勉強に向け、悲しみを紛らわしています。

自分の不安を欺こうとしているのです。

〔悲しみの歌〕第五卷第七歌三七―四〇

言葉で生きる詩人にとって、こういう異境の蛮地で暮ら
すことにより、自らのラテン語がさびつくことは死を意味
するほどに恐ろしいことである――

まわりの少数の者にはギリシア語の名残があるが、

それすらもゲタエ語の音で野蛮なものとなっている。

この連中の中で、ラテン語で何か簡単な言葉を

言えるんじゃないかと思わせる者は一人もいない。

私はローマの詩人であるのに―詩女神よ、許し給え―

ものを言う場合、大半サルマタエ風に言わざるをえない。

ああ白状するのも恥ずかしいが、長い間使っていないも

のだから

ラテン語が私に浮かぶのはやつのことなのだ。

この本の中にもきつと野蛮な言い回しが少なからず

あるに違いない―それは人間ではなくて場所の罪。

しかし、私はラテン語との関わりを失わぬよう、

また、私の声が祖国の音に沈黙しないよう、

自分に向かって語りかけ、使わなくなった言葉を呼び戻し、

詩作という不吉な軍旗の下に戻っているのだ。

〔悲しみの歌〕第五卷第七歌五一―六四

そういう中で、本こそはオウィディウスにとって自らの
分身に他ならなかったのである。それが一番よく分かるの
が『悲しみの歌』第一巻第一歌の冒頭部分である。

ちっぽけな本よ、羨ましくは思わないから、私を連れず

に行くがよい、都ローマへー

ああ、それにしても、お前の主人であるこの私には行く

ことが許されていないとは！

行くがよい、でも飾りたてずに、流刑者の本にふさわし

い姿でー

不幸な奴よ、私の今のかっこうそのままです。

赤い染料で染められてはいけません！

その色は嘆きにはふさわしくないんだからー

書題が朱で印されたり、紙に杉の油を塗られたり、

本の黒い端に白の飾りがつけられたりしてはならぬ。

このようなもので飾られるべきは、幸運なる本、

お前は私の運命を忘れてはいけません。

本の端がもろい軽石で磨きたてられてはならない、

髪振り乱している姿を見てもらうため。

染みを恥ずかしく思わなくてよい。それを見た人は

私の涙でできたものと思うだろうから。

さあ行け、本よ、私の言葉でなつかしの場所に挨拶を。

私はせめて許されている韻脚でかの地を踏むことにする。

〔悲しみの歌〕第一巻第一歌一〜一六

この詩はすぐに抒情詩人カトゥッルス第一歌冒頭の部分を想起させるだろう――

誰に贈ろう、この出来たばかりのしやれた本を、
乾いた軽石で、磨きあげたばかりのやつを？

(一〜二)

古代ギリシア・ローマの「本」がどういうものであったかここで整理しておこう。よく知られているように、本はパピルスで出来ていた。先ず、「紙」はナイル川のデルタ地帯の葦の茎の皮をむいて中心部を帯状に切って維管束をたてよこに重ね合わせ、つぶれた髓から出る液をのりにして貼り合わせて作られる。次にこの「紙」をつなぎ合わせて「巻物」が出来上がる。ここに葦や鉄の先割れペンで、インク（細かい煤などを水に溶いてつくられた）を用いて書くことによって、本が完成するわけである。「卷子本」と呼ばれるものがこれである。これに対して、今、我々が読んでいるような本は「冊子本」（コーデックス）と呼ばれるものである。これが出来てくるのが紀元後二世紀頃からと言われている。コーデックスにはパピルスの他に羊皮紙も用いられることになる。

それ以後の本の歴史では、写本から活字本という変化が第一次革命とも呼ぶべきものであろうし、さらに、現代ではコンピュータの発達により、「電子本」が登場しており、第二次革命とも呼ぶべき時代に我々は突入している。「電子本」の意味や重要性とか、「電子本」とこれまでの本との関係とか、いろいろと話題になっているのが今日の本

に関わる問題と言えるであろう。

さて、話を古代ギリシア・ローマの「本」に戻そう。オウィディウスやカトウツルスの詩で分かるように、古代ギリシア・ローマの本は巻物になっていて、木か象牙の軸にパピルスの紙（保存をよくするために杉の油が塗られた）が巻き付けられ、軽石で巻物の端をそろえて滑らかにされた上で縁が黒く塗られているという体裁になっていた。

オウィディウスは、そういう普通の本の体裁で行けないからといって何も恥じ入る必要はない、いや、むしろ、そうすれば私の今の姿と同じだからかえって私の苦境を伝えるのに都合だと本に向かって言っている。彼は「生きていることも神の贈り物だと考えている」ほどなのである。

詩人は自らの分身である本にさまざまな伝言を依頼するが、その言葉の根底には、自分が本となってローマへ行きたいという思いがあることは疑いえない。そのことを最も明らかにしてくれるのは、次のような詩行である――

だが、お前は私に代わって行くがよい、そうすることを許されているお前はローマを見てくるがよい――

ああ、今、神々が私を本にしてくれればよいのだが。お前は大都会へ異人として入っていくのだから、

人に知られずに入って行けると考えてはいけない。

肩書きがなくても、お前の外観でそれと分かるだろう、隠れているようにたって、お前が私のものであることは一

目瞭然。

〔「悲しみの歌」第一巻第一歌五七～六二〕

妻と娘と故郷に別れを告げて、半年以上かけて、流刑地トミスに辿りついたオウィディウスは、それから十年もの間、嘆願の日々を過し、ユピテルとも呼ぶ皇帝アウグストゥスにローマ帰還の願いを繰返すが、ついに、再びローマに帰ることなく、異境で一人寂しくこの世を去るのである。享年六〇歳。彼を追放処分にした皇帝は既にその三年前に亡くなっていた。

■引用した詩は拙訳による。テキストはオクスフォード・クラシカル・テキスト。

■古代ギリシア・ローマの本に関しては次の文献を参考にした。

・レイノルズ、ウィルソン共著『古典の継承者たち』（西村賀子、

吉武純夫共訳、国文社、一九九六年）

・逸見喜一郎『古代ギリシャ・ローマの文学』（放送大学教育振興会、一九九六年）

（大阪大学言語文化学部教授）

古代人の食卓メニュー

南川雅男

飽食の時代と言われて久しい。終戦からまだ幾ばくもたっていない子供時代をふりかえれば、粗末な食卓の記憶が少しは蘇ってくるが、本当の飢えを私も知らないで過ごしてきた。あるとき、レストランで知人のドイツ人が、「私は肉をあまり食べないんだ」と言うので、その訳を聞いたことがあった。ご多分に漏れずダイエットでも、と気軽な問いだったのだが、その返答は、「自分は子供の頃、終戦直後で食料もあまりなく、肉などほとんど口にしてこなかった。そのせいか、今でもあまり肉料理を食べたいと思わないんだ」とのこと。同世代で、同じような状況にあった日本で育った自分は、高度成長のなかで年々肉料理にありつける回数が増えてきたことを実感していたし、少なくともその変化を甘受してきただけに、意外な思いがした。同時に人の食物嗜好はこう簡単に変わるのかと驚きもした。

日本人が稲作に根ざした穀物食の民族だったのに対し、もともとヨーロッパ人は肉食中心の食生活を送ってきたのではなかったか。それは彼らの祖先が牧畜や狩猟を生産手

段としてきた歴史に関係するらしい（鯖田豊之著、『肉食の思想』、中公新書）。また一方、もって生まれた民族性は、一時的な環境変化にそう容易に順応するはずがない、という常識もある。だとすると現代の日本人の食生活の欧米化、肉食化は異常なことであるし、ドイツの友人の理由づけも、どうもよく理解できないことのように思える。いったいわれわれは生まれつき食物にどのようなこだわりがあり、またどこまで順応できるのだろうか。

書店の棚には食べ物に関する内外の書物が実に多い。現代人がいかに食物に関心を持っているかが良くわかる。とりわけ料理と食生活に関する書籍が多いが、食文化の分布や起源に言及した書籍も多い。この傾向はテレビ番組や新聞などにも表われていて、海外取材で構成されるグルメ番組が多数あり、われわれはいつのまにか多種多様な食物に関する情報をインプットされている。そのなかで、知らず知らず食物に関する様々な知識を植え込まれている。なかにはあまり根拠のない「通説」も相当多いと見受けられる。

図1は、さまざまな古代人集団の炭素・窒素同位体組成の分布図である。縦軸も横軸も数値が大きいほど質量数の大きい方の同位体の濃度が増すことを示している。この図では、一般に N の濃度が高いほど肉食度が高いことを意味する。本研究で分析対象にした先史人骨試料の産地、遺跡名等を図2に示す。その同位体分析の結果は各集団ごとに平均値で図1に示してある。いろいろな地域で古人骨タンの ^{13}C 、 ^{15}N 濃度はともに大きな差があることがわかる。この差の大きさは、同様の分布をいろいろな国の現代人についてみた場合と比較すると、先史人では極端に集団間の違いが大きく、特徴がはっきりしている。図1には、主な食物資源の同位体組成の分布範囲も斜線で示してある。古代人の値がこの資源のどれに近いかで、その人が生前何を主要な食物としてきたかが見て取れる。図には示していないが個体ごとの同位体組成は、集団あるいは遺跡内で比較的狭い範囲内にあり、現代人とあまり違わない。これらの結果は、地理、環境、時代が異なる集団間では同位体組成は大きく異なっており、このような違いを生じさせるだけ、それぞれの集団の利用食資源が異なっていたことを証明している。

日本各地の古代人の同位体分布から推測された食性の大きな特徴は集団間で大きな変化があることである。北海道の縄文人や続縄文人は海産動物(オットセイやイルカ)に

大きく依存していたことがわかった。またその傾向は近世アイヌにも共通であることから、この地域では約六〇〇〇年にわたって海産動物の利用を基礎とした特徴ある食生態系を形成していたことはまちがいないだろう。

これに対して関東や東北の沿岸に居住した縄文人は海産物も利用できたはずだが、むしろ陸上の植物資源(ドングリやイモなど)や動物(シカ、イノシシ)も積極的に利用しており、これらの食物をバランス良く利用していたと思われる。その結果、肉食度は北海道の先史人より低い。同様に、中国地方の寄倉や、長野県の北村遺跡など内陸にいた縄文人では、水産資源の利用は僅少で、大部分が植物と陸上動物に依存しており、もっとも肉食度が低いことが確認された。

また、北九州や中国地方の弥生人、現代日本人の同位体組成を同じ図に載せてみると、関東の縄文人とほぼ同じ位置関係にあることがわかった。

これらのことから古代人の肉食度は、地理的な条件によって左右され、一般に北にいた集団ほど肉食度が高い傾向が認められた。また、少なくとも六〇〇〇年前以降は、時代とともに肉食度が高まるということは、日本列島では起こっていないことが明らかになった。こうしてみると、日本人の祖先としての縄文人は、肉食から、魚食、植物食まできわめて多様な食物に順応しており、おそらくはその文化的背景も多様であったと思われる。

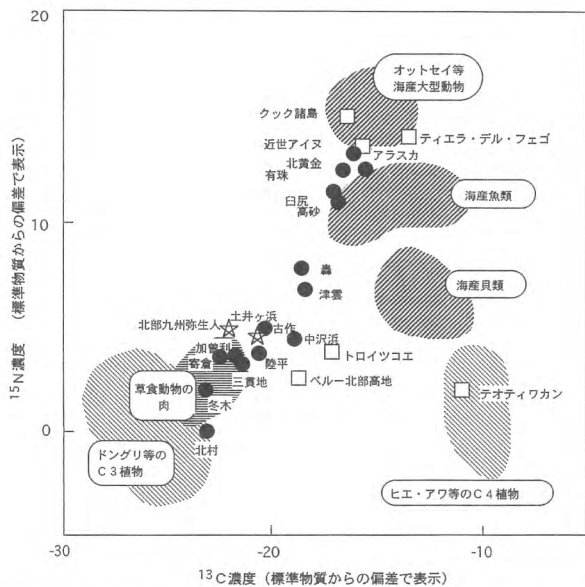


図1 古代人の食物と人骨タンパク質の ^{13}C ・ ^{15}N 濃度

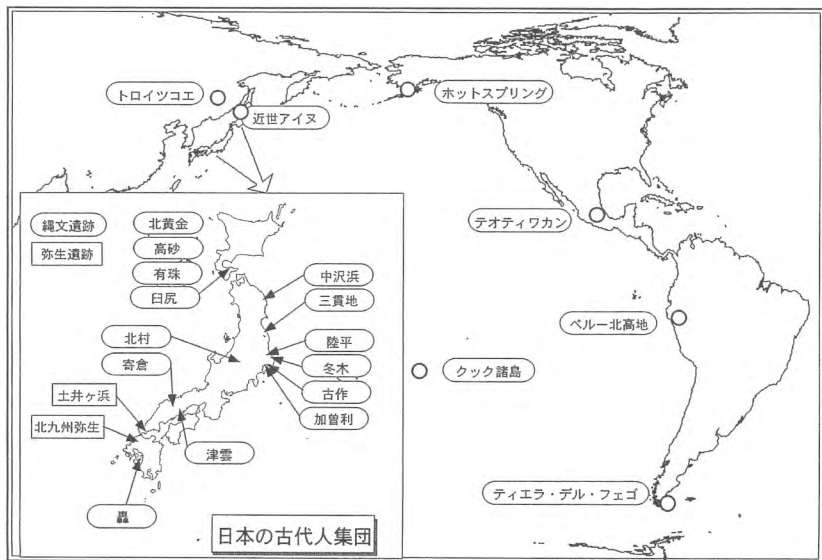


図2 先史人骨試料の産地・遺跡分布

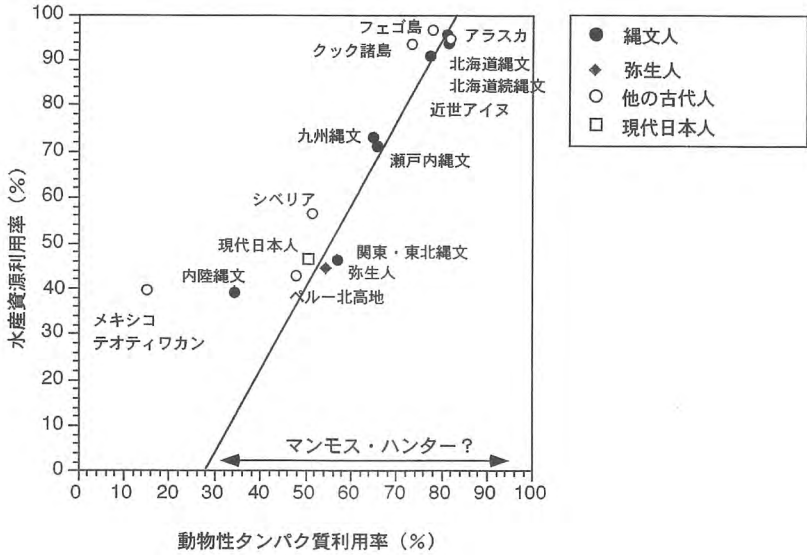


図3 古代人の海産物利用

これまで調べてきた古代人の食性解析の結果を海産物の利用という点からまとめると図3のようになる。タンパク質を動物資源からとっている割合を（動物性タンパク質利用率）とし、その内で海産物が占める割合を水産資源利用率として、両者の関係のみている。その結果、タンパク質を五〇％以上動物からとっていた古代人は、ほぼ確実に海産物を利用しており、動物資源に八割以上依存している肉食度の高い古代人は、そのほとんどの食料を海産物にもとめていたことがあきらかになった。この特徴は、縄文人についてもなりたっているだけでなく、ここで調べた各地の先史モンゴロイドにも共通した傾向とみなすことができる。人類がいつごろ、どこに現われ、どのように進化していったか、これはわれわれにとって永遠に興味を惹いてやまないテーマのひとつであろう。それは、あまりに少ないヒントでクイズに誘うような危険な魅力に満ちている。具体的な証拠を置き去りにして解答を積み重ねていけば、ほとんど正解のない世界になってしまいかねない。その点で、本稿で述べた同位体による食性解析法は、主観に左右されることが少ない、比較的定量的に評価ができるなどの特徴により、客観的な証拠をひきだせる可能性がある。特に食生活という古代人も現代人も共通の生存環境で比較することにより有効なヒントを与えてくれるのではなからうか。

（北海道大学大学院地球環境科学研究科教授）

京都で日本出版文化史展を見る

関野利之

京都文化博物館で日本書籍出版協会主催の「日本出版文化史展 '96京都」が開催された。サブタイトルに「百万塔陀羅尼からマルチメディアへ」とあり、日本の出版発祥の地・京都で、日本の出版文化を回顧・概観し、同時にその未来を見極めようという意図がじゅうぶんに読みとれる展示会でもあった。会期は2月3日から25日までであったが、機会を見て23日に足を運ぶことができた。

日本では現在、五千社を超える出版社が七十社の取次店二万六千の書店を通して、年間五万点の新刊書籍と五十万点の既刊書、雑誌四万点、総数で書籍十四億冊、雑誌四十九億冊を世に送り出しているという。日本は世界でも屈指の出版王国である。

「人類の蓄積した精神文明と学術文明を普及させる使命を再認識しなければならない、出版とは本来なにを目指すべきものかを改めて問い直したい」という主催者の「あいさつ」をしみじみと噛みしめつつ、会場での三時間の漂流を楽しんだ。

近年の写真・製版・印刷の長足な進歩は、マルチメディアの進捗とともに出版業界にパラダイムの急激な展開を自

覚させるものがある。この展示会は、かつての先人たちの遺産である筆写から木版刷り、活字組み版、電算写植などを踏まえた上で印刷・出版の未来を見据え、さらに著作活動の充実にも資するものである。

展示場は、四つのゾーンで仕切られている。「未来の出版のかたち」としてCD・ROMからインターネットへと夢ひろがるマルチメディア時代の電子出版の現状や電子図書館等を扱ったゾーン4を経巡るように、ゾーン1からゾーン3まで左回りに回ることになる。

ゾーン1は「出版前史」と題して、日本の出版の原点ともいふべき、「寺院版と写本」の世界を現出させる。百万塔陀羅尼、宮城図、類聚古集、宋版・春日版・高野版・堺版・五山版などが展示されている。

ゾーン2は「近世」である。民衆が創り上げた日本独自の出版文化として、木版刷りや古活字版を展示する。切支丹版・駿河版・勅版・伏見版、光悦本・元和寛永謡本・昌平版、絵本類・好色本・洒落本、読本・和歌・俳諧から演劇台本、茶道・華道・書道の善本、京都地誌・古地図など

が色彩豊かに展示されている。このゾーンは会場スペースの半分以上を占めており、見応えのあるレイアウトになっている。

ゾーン3は「近・現代市民文化の成熟をめざして」と題して、蔵志・解体新書・蘭学階梯・舎密開宗・ハルマ和解など、西欧文明との格闘の成果が展示されている。また明治初期から戦後までの文豪作品の初版本、受賞図書・ベストセラーが集成されている。

現代先端技術の精粹を受けながら創造的な出版の営みを考えるとき、現代に生きる私たちは過去の遺産を享受し消化し、それなりの覚悟をもって対応しなければならぬ。

素朴な人のぬくもりがそのまま触感となって伝わってくる、世界最古の木版印刷物といわれる百万塔陀羅尼経の「無垢浄光経 息陀羅尼」、宋時代の中国から舶載されてきた「宋刊纂図互註尚書」は切れのよい文字振りと目に染みる印刷が印象的でもある。さらに春日版「成唯識論正義燈」は朱筆で加点されており、平安時代後期の刊本・訓点資料として注目されている、という。「宮城図」は、建物の輪郭・要点を朱筆で描き、その数値・建造物の位置関係の正確極まりないことは現代の発掘調査で実証されているという。見事なレイアウトでもある。

冷泉家「明月記」は、藤原定家の自筆日記であり、挿し絵入りの巻物は、定家の書き癖をも強調していて興味深かつ

た。国宝「類聚古集」、解説によると類聚は、同じ種類のものをそれぞれ一つに集める意味であり、古集は平安人のいう古万葉集のことを指すという。つまり万葉集の歌を短歌・長歌などの歌体で大別し、さらに春夏秋冬・天地・山水などの題材に分類している。原漢文の本文を最初に挙げてその次の行に平仮名で訓を記してある。紙面の斬新さはもちろんのこと、編集技法的には現代のパソコン論理と全く同じものを感じ取って興味深く見た。すなわちいわゆるツリー状の論理構造である。

このような、日常生活時間の中ではつい見過ごしてしまふものを、京都という土地柄が生み出すゆつたりとした時間の流れの中で鑑賞し発見できたことは幸せであった。

ゾーン1の原本を忠実に写す、臨写や謄写という技法が、素朴で緊密な一対一の間関係に似ているとすれば、ゾーン2では、知の共有化ともいえるべき一般民衆のための出版文化の営みがくりひろげられる。江戸・駿河・京都・大坂に輩出した書肆の活性がきらびやかに展示される有様は、まさに文化の多様性を見せつけられるようであった。

出版文化を成立させる要素を、熟練した職人集団、資本蓄積を準備した書肆、東西の知識に通暁した著作者、それを享受する水準の高い読者ということになると文化の担い手は当然京都に集中し、町衆が登場することになる。そのご読者層が広がるにつれて、出版業の重心も上方から江戸

へと展開する。時代の流れに出版も適応してゆくことになる。

切支丹版の「ドチリナ・キリシタン」「こんてむつすむん地」は、加津佐・天草・長崎・京都などで印刷されたという。

朝鮮・李朝時代の金属活字印刷も精緻を極めて美しい。千支にちなんで名付けられたという癸丑字による「東国輿

地勝覧」が展示されている。つづいて日本の古活字本と呼ばれる、木製活字による慶長勅版「日本書紀 神代巻」は、日本の活字印刷の嚆矢とされるが朝鮮版活字と対比してみると比較文明の交流を暗示しているかのように興味深い。場内の一画には、木版の実物見本、刷り・和綴じの実演のコーナーが設定されていた。

知りたくて、伝えたくて、
読みたくて、読んでほしくて、
人話、本をつくる。

THE CULTURAL HISTORY OF BOOKS & PUBLISHING IN JAPAN

日本出版文化史展 '96京都

百万塔陀羅尼からマルチメディアへ



1996年2月3日(土)~25日(日)

休館日=2月21日(水) 開館時間=午前10時~午後6時(入場は午後5時30分まで)
入場料=一般1,000円(800円)・大中学生800円(640円)・小学生600円(400円)

※()は前売券及び20名以上の団体料金

主催=日本書籍出版協会、京都文化博物館、朝日新聞社
協賛=京都府、京都市、京都市教育委員会、京都府教育委員会、京都府教育委員会、日本放送協会、
日本放送協会、日本放送協会、日本放送協会、日本放送協会、日本放送協会、日本放送協会、
協賛=大阪府、兵庫県

京都文化博物館
〒604 京都府京都市三条区 075-227-0000

「日本出版文化展 '96京都」ポスター

興味深かったのは、徳川家康が自分の政治理念の普及のために活字印刷に注目し、これを利用したことである。京都・伏見の円光寺は家康が建立した漢学を教授する学校である。木製活字十万个を新彫し、伏見版木活字とし、「孔子家語」など一連の書物を刊行している。なかでも興味をひくのは漢字活字の他に、割注用漢字活字や頭注に使用された陰刻活字、片仮名活字であり、そこに組み版の原型を見る。活字の側面には彫工の名前の一部が墨書されている。また駿河版の銅製活字とその印刷による「群書治要」も展示されていた。つい先頃まで私ども出版人にとって馴染み深かった活字の成立を文化史の形で捉えるのも、時

代の急激な趨勢といえよう。

嵯峨本も美しい。雲母刷りの下絵に、本阿弥光悦が版下を書いた工芸豪華本である。「嵯峨本謡曲百番」など古活字本の精粹とされる。稻生若水の「本草綱目」、山脇東洋の「蔵志」、蘭学勃興の契機となった「解体新書」、数学書の「塵劫記」、日本産業の鳥瞰図「日本山海名物図絵」「日本山海名産図絵」、名所図絵の契機となる「都名所図絵」、現代の小説・読み物に相当する井原西鶴の「好色物」「日本永代蔵」、十辺舎一九の「東海道中膝栗毛」など配色よくレイアウト・展示されている。喜多川歌麿の挿し絵入り「画本虫撰」、飯沼慾斎の「草木図説」、銅版「蒲桃」図などは、細緻を極めた描写が魅力的である。ポップアートに相当する何種類かの仕掛け本も登場していた。

この時代の締めくくりは、日本最初の分析化学書「舎密便覧」、江戸時代最大の刊行と称される「蘭語訳撰」、六万語を収録した「ハルマ和解」などは紙面構成もしっかりしており、日本人の特性をかいま見る思いがした。

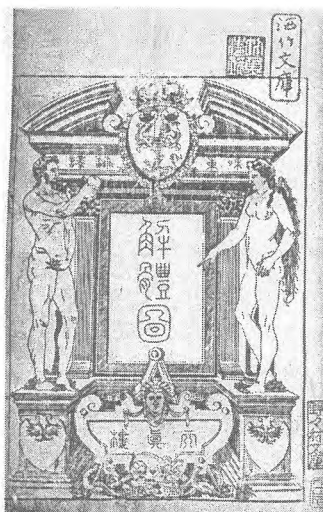
ゾーンの3になると、十九世紀後半の近代西欧工業化の波に洗われ、私どもにはかなりなじみ深い、出版文化の成熟という事態が現出してくる。

見所はゾーン1から、3の明治までである。かなりコンパクトに凝縮された、日本出版史の好テキストといえる。歴史を振り返ってみるということは、卑小な存在である個

人の次元から、より偉大な神の存在までをも包含する次元へのスタートに他ならない。

ゾーン1から3までに示された、歴史としての紙とインクの二次元・三次元の世界から、ゾーン4「あすの出版文化」は、時間の次元を加えた時間・空間的な連続体、四次元の世界へ移行しようとしている。現代のコンピュータ技術の進歩、情報のデジタル化によって出現する文字・静止画・動画・音声をふくむマルチメディア世界に、出版界はどのように対応してゆけばよいか？ これからの課題であろう。たとえばインターネットという私たちの身近に迫りつつあるパラダイムの展開にいちばん鈍感なのは、意外と当事者である私たちなのかも知れない、という感想をもつて会場を後にした。

(なお資料として日本書籍出版協会刊行の「日本出版文化史展 '96京都」を使用した) (玉川大学出版部 参与)



解体新書扉

オンライン受発注稼動一カ月を過ぎて

佐野 雄治

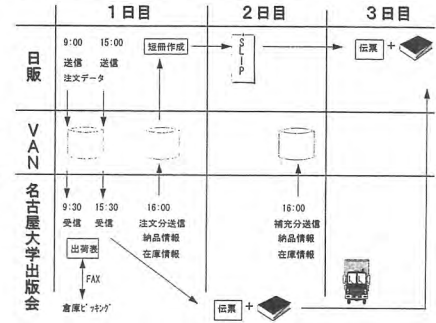
この一、二年「オンライン受発注」という言葉を、業界紙・誌で、また業界の集まりでよく見聞きする。出版社によって、システムレベルのバリエーションはあるが、現在「オンライン受発注」システムを稼動しているのは約50社である。特にこの一年で約30社が参入し、急速の感がありこの勢いはまだ加速するものと思われる。小会も今年3月25日から「オンライン受発注」システムを稼動したので、その事例と小会ならではの特殊性、また稼動してから気づいたことなどを紹介したいと思う。

出版業界の物流面で最大の関心事は、懸案事項でもある商品をいかに早く物流システムに乗せるかである。特に、取次に在庫がある商品は別として、在庫スペースに限りがある以上、ここで問題となるのは非在庫商品の扱いである。首都圏にある出版社はさほど痛感していないかもしれないが、日頃から情報・物流面でハンディを感じているのが、物流の中心である首都圏以外に拠点を構える小会のような出版社である。短冊の流れで例を上げると、東京に集中して来る短冊は、首都圏外の出版社の場合、東京↓取次支店↓出版社（ピッキング）↓取次支店↓東京といった具

合である。短冊の日付を見ると受け取った時点で既に2〜3週間過ぎていることはざらである。さらに、これと同じ日数をかけて書店に商品が届くのである。小会の場合、戻りの日数を少しでも短縮するために支店在庫を厚くしたり、小会に回ってきた短冊・電話・FAX注文を支店を通さずダイレクトに東京に宅配便で送っている。取次の支店に在庫があっても毎日、東京へは便は出ないのである。取次の支店機能は、あくまでその支店の管轄する書店への物流が優先され、地元出版社の他地域の書店分の物流は二の次になっているのが現状である。首都圏外にある他の出版社も事情は同じと思われる。商品を早く届けることにより、常備回転率が上がるなど販売力が高まることは言うまでもない。以上のように、小会では現状を改善するために昨年一月から調査・取次との打合わせを数回行い「オンライン受発注」システム導入に至った。その間に東京大学出版会のシステムを見学させていただき、非常に参考になった。特に、辻・遠藤両氏には大変ご協力をいただいた。

先に述べたように、「オンライン受発注」といっても出版社によって様々なレベルがある。受発注だけを稼動して

名古屋大学出版会送受信タイムスケジュール



てメリットを感じたのは常備商品が回転してること、新刊の動きのよさが顕著に表れていることがあげられる。在庫情報は毎日流しているが、小会の場合、在庫ステータスの設定方法を各商品に設定してある最低在庫から自動的に計算させて決定している。日々、在庫は増減するので一日で「在庫有り」から「重版中」にステータスが変更することもある。小会では、毎日、在庫ステータスの変更があったものだけが、自動的にプリントアウトされるので常に商品在庫に注意が働くようになっていて、こんなこともあった。ある書店から電話で商品の重版出来日を探ってきたので、「重版予定はない」と答えると、「コンピューターに「重版中」とでている」と言われ、確実に在庫情報は書店まで流

いる出版社、在庫情報（在庫有り・在庫僅少・重版中・品切重版未定等）だけを提供している出版社、両方共稼働させている出版社に大別できる。小会では、受発注・在庫情報提供と両方稼働している。「オンライン」の流れはご覧の図でお分かりになると思う。導入し

れていると分かって安心した気持ちになる一方、信憑性のある在庫情報を流さなくてはと痛感した。

「オンライン受発注」システムを始めて一番感じたのは、導入の必須条件として、「在庫管理」が整備されていること。「人材」が必要なこと。毎日、午前・午後合わせ一日計4回受信・送信の処理があるので、複数の人間がその業務を周知している必要がある。そうでなければ、一人体制では販促・出張にも出られず、「オンライン受発注」のために出張にも出られないのでは本末転倒になってしまう。

「オンライン受発注」はあくまで販売支援システムと解し、地道な営業活動があつてこそである。在京以外の出版社で「オンライン受発注」システムに参入したのは、小会が初めてであるが、むしろ首都圏外に位置しかつ学術専門書の出版社の方がメリットがあるのでないだろうか。小会のように、商圏が圧倒的に首都圏にある場合、「オンライン」によって距離感が短くなるのである。

「オンライン受発注」システムの動きが活発になってきたと言っても、まだまだ参加出版社も少なく、書店にいたってはSA機器は持っているものの「オンライン発注」には至っていないなど、理解度を含め、足並みが揃っていないように思われる。そこで、業界全体でハード・ソフト両面から「オンライン受発注」をより身近なものとする方策を見つけて出し、早期に業界統一VANを設立することが望まれる。

（名古屋大学出版会）

自分のルーツとの再会

東京ドイツ文化センター図書館を訪ねて

桜が満開の頃だった。埼玉県北部にある自宅から二時間半の長い道のりでやっと辿り着いたのは、赤坂七丁目にあるドイツ文化センターであった。以前から、挨拶に行かなければと思いつつ、中々実現せずにいた。地下鉄赤坂駅の改札を出たのはいいが、さて場所が分からない。思わずタクシーを捕まえ、行き先を告げた。赤坂御所に程近い、カナダ大使館の隣にセンターがあった。

私を待ち受けていたのは、図書館長のヘラ・クラウザー (Hela Krauser) さんと、館長代理の吉次基宣さんだった。私が日本語で自己紹介をするものだから、彼女は親切に、「ドイツ語でいいんですよ」と言ってくれた。何を勘違いしていたのか、ここは私の母国語であるドイツ語で話しても通じる場なのだ。気を取り直して、前日の私の突然の取材依頼をこのように即座に引き受けていただいたことに感謝して、取材がはじまった。

先ず、図書館の中を案内してもらった。蔵書数は約一万八千冊だが、ドイツの文化全般に関する幅広い情報を提供

するために、毎年、八百冊程度の本を入れ換えるのだそうだ。入り口付近には、百科事典や住所録が置いてある。一部のデータベースのCD-ROM検索も可能だ。図書館としては、とくに哲学、社会科学、芸術、文学と歴史(政治)の各分野に重点を置く。和書も多いということは、図書館の利用者の九〇%が、日本人だからである。当初からあった日本学関連の学術書のコーナーは、別の専門図書館が存在するために、なくす方向で検討している。

ドイツ文化センターといえば、ドイツ語講座で定評のあるところだ。一般的に知られていると思うが、このセンターのドイツ語名はGoethe-Institutだ。世界で百五十以上のインスティテュートが、七十数カ国で、ドイツの文化を紹介している。世界に三千六百人以上の職員を誇る当センターの総本部(インターネット・ホームページのURLは <http://www.goethe.de>)はシュンヘンにあって、その運営予算の大半は、ドイツ外務省から出ている。ドイツ語講座の受講生は、ドイツ国内の学生を含めると、世界で年



受付カウンター

間十万人を超える。全世界で、毎年、一万四千もの文化的催物が開催され、書籍雑誌、ビデオ、CD等々の総貸出件数は、百六十万件にも及ぶ。

とにかく、ドイツに関する問い合わせには、その場で回答を出せる態勢だ。どうしても手に負えない問題が生じると、ほかの専門機関の連絡先を教えてくれる。

Goethe-Institutの強みは、この巨大な組織力にある。その中枢ともいえるべき図書館には、様々な人が訪れる。再統一されたドイツに関心を寄せる者は、益々多くなった。例えば、マスコミ各社が情報を求めてくる場合、その問題について多義的に説明するように努力する。「税金でもって運営されているわけですが、政府の正式見解に依存せずに、わたしたちはドイツの良い面も悪い面も、同時に、そして公平に伝えています」と館長は説明する。

昨年は、戦後五十年という節目のときであったため、日本の九つの会場で、ドイツ語による関連書を展示した。わたしが「最近、日本の大学では、独文が下火になってきましたね」と水を向けると、彼女に「それは文部省のカリキュラム改革

の所為でしょうね」と返答されました。百十の重要なドイツの新聞・雑誌の最新号をリアルタイムで手に取ることが出来る。図書館内に設けられている利用者のための机と椅子は、窓際にある。顔を上げれば隣のカナダ大使館の庭を眺められる。勉強や情報収集に励むものには、打って付けの場所だ。

図書館が入っているビルの一階には、ドイツ・レストランがあった。取材日には、もちろんそこで食事をとった。趣味と実益が兼ね備えられた、長い一日が終わろうとしていた。気が付くと、帰りの電車のなかで、ひとり、「自分のルーツに再会できた」ことへの喜びを噛みしめていた。

(聖学院大学出版会・荒木忠義)



雑誌閲覧の前で クラウザー館長

東京ドイツ文化センター

〒107 東京都港区赤坂 7-5-56
 TEL 03-3583-7280 FAX 03-3586-3069
 開館時間：火・水・金 12:00-18:00
 木 12:00-20:00、土 10:00-16:00
 交通：青山一丁目駅または赤坂見附駅下車



国際出版連合（I P A）第25回大会

▼大学出版部協会一九九六年度通常総会

四月三〇日（火）東京ガーデンパレスにおいて一九九六年度通常総会が催されました。例会・各部会に引き続いての懇親会では、山下幹事長より、四月二日から二六日にかけてバルセロナで行われた国際出版連合（I P A）第25回大会についての参加報告があり、電子化時代における日本の出版社、とりわけ大学出版部の果たすべき役割が強調されました。時間の関係で詳細については触れられませんでしたので、以下に本大会の主要テーマを記しておきます。

▼国際出版連合（I P A）第25回大会テーマ

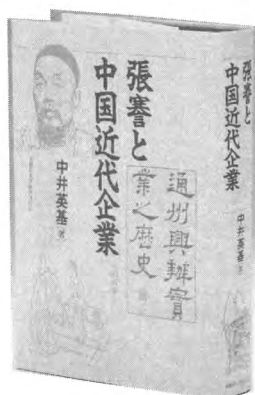
- * 開会式（基調講演「出版者の社会的役割」書物からマルチメディアまで」ウンベルト・エーコ）
- * メディアの集中化と相乗効果
- * 電子化時代の標準化
- * 出版者の創造的役割（全体会議）
- * 技術開発「電子図書から情報ハイウェイまで
- * 販売市場（全体会議）
- * ニューメディアと本の将来（全体会議）
- * 異文化・クロスカルチャーにおける出版者の役割（全体会議）
- * 閉会式（特別講演「出版は自由な創造と進歩の礎」S・ストローム）

北海道大学図書刊行会

▼安藤正人・青山英幸編著『記録史料の管理と文書館』（A5判・八八五八円）

現代の記録史料保存の主要課題である評価・選別問題を中心に、日本の古代から近・現代に至る文書管理の歴史と現状、さらには欧米の理論と実態を分析。文書館のあり方に新たな問題を提起する。気鋭の文書館員グループによる共同研究。

▼中井英基著『張謇と中国近代企業』（A5判・一〇三〇〇円） 従来、政治面に限定されてきた近代中国激動期の読書人＝張謇の研究に、「企業者史」という新しい視点から光をあて、紡績と開墾を中心に彼の企業者活動を分析。中国の工業化や近代化に果たした張謇の功績を、長年の研究の蓄積を踏まえた緻密な実証に基づき明らかにする。



聖学院大学出版会

▼本学がこのたび大学院政治政策学研究所が新設された。弊出版会は母体である聖学院大学が設立された一九八八年四月にその萌芽がある。大学は教育と研究が主目的で、それらを支えるため出版事業が位置づけられるが、大学院、総合研究所そして出版会と三つの組織が有機的に機能するよう新設大学ながら社会に貢献したいと願っている。

▼最新刊 澁谷 浩著『オリヴァー・クロムウェル 神の道具として生きる』(二〇〇〇円)は英国一七世紀の清教徒革命の指導者クロムウェルの評伝である。

▼目下進行中のものとしては、工藤英一著『ガルスト研究』がある。ガルストは明治中期のキリスト教宣教師で、本学院の系統であるディサイプルス派所属である。神からの預かり物である土地にのみ課税されるべきとしたいわゆる単税論を主張し、単税太郎と親しまれた日本社会運動の草分けである。

▼次のE・プルンナー著『正義』(寺脇不信訳)は、戦後間もなく三鷹に創立された国際基督教大学に客員教授として来日されたスイスの神学者の論説である。

慶應義塾大学出版会

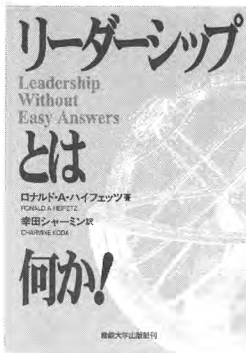
(旧慶應通信)

▼『障害学生の支援―新しい大学の姿』AHEAD日本会議より(富安芳和・小松隆二・小谷津孝明編―四六判二五〇〇円)実際に障害学生による国際団体AHEADの第一回日本会議が昨年七月、慶應義塾大学で開催された。本書にはその会議の記録、当日配布の教職員と学生に対する支援の具体的手引書、および障害学生支援の意味・大学の役割等の解説が集録されている。欧米より遙かに遅れているといわれるわが国大学における障害学生支援体勢を考える良き資料としてすべての大学人にぜひ一読をすすめたい。

▼『子どものこころ―その成り立ちをたどる』(小倉清著・四六判二四〇〇円)本書は誕生前から青年前期までの子どもの心を発達段階にそって記述している。子どもの時に体験した心は、成長し大人になった時にも確実に存在して、終生様々な形で生きつづけるので、この子どもの心をたどると、現実の大人の心の理解に通じるのである(著者)。そのように本書は、人間の心全般を指向している明快な手引書とも言えるものである。

産能大学出版部

▼『リーダーシップとは何か!』(ロナルド・A・ハイフェッツ著・幸田ジャーミン訳、二八〇〇円)真のリーダーシップとは何か―社会・政治・経済が混迷の時代を迎えた現在、リーダー不在の時代といわれるわが国にとって、まさに最大不可欠の問題である。社会・経済の変化にもかかわらず、現在起きている変化への適応を拒み、旧来の価値観や手法にしがみついているのは、混迷の時代のリーダーシップを発揮することはできない。そのためには、どのように変化に対応し人々を適応せしめたらよいか。ハーバード大学でリーダーシップ論を教え、リーダーシップ研究では世界的な第一人者である著者が、豊富な事例とともに、その処方を示す、アメリカで話題の書。



専修大学出版局

▼森武夫著『かれらはなぜ犯罪を犯したか——8人の鑑定ノートと危機理論』(三三九円) もしも幼児期に母性の剥奪があった場合に、その人間の発達にどのような危機が生じるのか：本書は、鑑定人として多くの非行・犯罪者の問診をしてきた著者が、従来の発達心理研究と自己の実践から帰納的にみちびいた仮説(危機理論)を骨子として展開する、犯罪心理・論である。鑑定ノートの内容を可能なかぎり開示し、分析してみた、ドキュメンタルな心理学としての興味もそそる。

▼大島良行著『風と共に去りぬ』の女たち ミッチェルの生き方とアメリカ南部(二五七五円)『風と共に去りぬ』の魅力は、動乱の時代をたくましく生きようとするひとりの女性の姿に集約される。本書は、主人公スカレット・オハラと著者ミッチェルの生き方を照らし合わせながら、アメリカ南部の歴史や社会制度さらには南部人の精神構造を掘り下げて、この小説の背景となった世界を明らかにする。いまだ人気不衰『風と共に去りぬ』を再点検する試みである。

玉川大学出版部

▼有本章・江原武一編著『大学教授職の国際比較』(四二一〇円) 大学教授は何のためにどのような仕事をしているのか。世界の大学教授職の現状を一三カ国・一地域を対象とした「カーネギー大学教授職国際調査」から分析、日本の特徴と課題を明らかにし、高等教育のゆくえと改革に重要な示唆を提示。

▼D・W・ブレネマン／宮田敏近訳『リベラルアーツ・カレッジの繁栄か、生き残りか、危機か』(三一九六円) アメリカ高等教育の真髄ともいうべきリベラルアーツ・カレッジは危機とされた一九八〇年代をいかに乗り切り、二一世紀へ向かおうとしているのか。学長経験のある著者が、経済学者としての視点から過去、現在を分析し、未来をみつめる。大学教授職の国際比較



中央大学出版部

▼嶋田襄平著『初期イスラーム国家の研究』(七二一〇円) イスラーム国家がいかにして成立し発展したかということは、イスラーム世界を研究する者のみならず、多くの歴史研究者が直面する課題である。

本書は、我が国イスラーム史学界の開拓者であり、研究者・啓蒙者として多大の業績を残した故嶋田襄平が、三〇余年にわたって発表した論考のうち、特に初期イスラーム国家の成立・発展について論じたものを集成している。

著者の研究の特徴は史料を網羅的に駆使し掘り下げた実証的手法にある。とりわけ初期イスラーム時代の土地・税制制度、法理論、マワリーリなどに関する研究は、欧米の研究をはるかに越える精緻なものであり、イスラームの根幹に関わる重要なテーマを含んでいる。

本書では、従来単独で取められて来たこれらの論考を五部構成とすることにより著者の歴史観をいっそう明確化すると共に、その成果がイスラーム史学界、ひいては全歴史研究者の財産として共有されることを願う。

東海大学出版会

▼地質環境と地球環境シリーズ③『阪神・淡路大震災―都市直下型地震と地質環境特性』中川康一・楡井久・赤松純平編 (定価三六〇五円)

ここ数年來、日本の周辺域ではしばしば大地震が発生し、そのたびに大きな被害を被っている。その中でも、昨年一月十七日に阪神・淡路島をおそった兵庫県南部地震は、神戸市を中心に死者六〇〇〇名を越える甚大な被害をもたらし、全国民に地震の恐怖を植えつけるとともに、地震国日本が宿命的に持つリスクをうきばりにし、わが国における都市防災のあり方について重大な教訓を残した。

本書は執筆者自身の現地調査に基づく豊富な記録と多数の図版を使い、被害状況や地質構造・断層を明らかにし、さまざまな角度から兵庫県南部地震に迫るものとして、本年七月の刊行を目指して準備中である。

地震を防ぐことができない現在、その原理と構造や特性を究明する試みは、今後とも起るであろう地震に対する防災意識や防災技術を高めるためにもなくてはならないものである。

東京大学出版会

昨年一月の阪神・淡路大震災は、戦後日本の住宅政策の欠陥を一举に露呈させ、国民は改めてわが国の住宅事情の貧しさを痛感した。また本年六月にはトルコで第二回国連人間居住会議(HABITAT II)が開催され、世界的に大きな話題となったことは記憶に新しい。

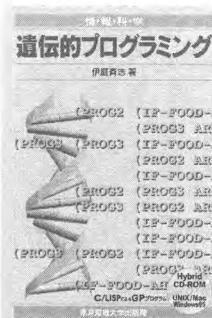
このように、国の内外を問わず居住問題に対する関心が高まっている折から、『講座現代居住』全5巻(早川和男編集代表)を刊行中である。構成は、①歴史と思想、②家族と同居、③居住空間の再生、④居住と法・政治・経済、⑤世界の居住運動。六月より刊行を開始し、八月を除く毎月一巻の配本で、一月に完結の予定(価各巻税込三九一四円)。

日本の現状に対する問題意識を出発点として、従来の学問的枠組みを越えた各分野の研究者の協力により、「居住」に関するさまざまな問題点を明らかにするとともに、現状打開を図り、二一世紀への展望を切り拓くための理論の構築、思想の提起を目指す本講座の刊行は、時宜を得たものとして、大きな意義を有すると考える。御一読を請う所以である。

東京電機大学出版局

インターネットがブームである。ユーザは爆発的に増え続け、今年中に世界で一億人になるといわれる。電話以来といわれる世界規模のインターネットの登場で人々が浮き足立っている。

入門の利用である電子メールをとって編集作業の変化の兆しを感じる。共著の本を企画したら執筆開始から、ほぼ毎日ネット上で編集会議が開かれ、脱稿、校正と進み、危うく著者の顔どころか声すら聞かない内に本ができそうになった。ニューロ、ファジーに次ぐ新たなコンピュータ理論として欧米で話題の遺伝的プログラミングの若手第一人者にとって、インターネットは研究に不可欠であるという。ネットの中に世界規模で自分の研究共同体を作っている。メールでなければ原稿の入らない著者たちの登場である。



遺伝的プログラミング
伊庭齊志著
A 5判、274頁、定価4429円

東京農業大学出版会

▼『雑学講座―地肥茄子大のはなし―』

(竹中久二雄著二七〇〇円)

この本は、「農大書報」に掲載された文をまとめた新たに書き加えたものである。名称のとおり体系的なものではなく、著者が農村調査の折にメモしておいた事ながら題材となっている。

第一章「コメと美人の断章」から始まり、「酒と林業と樽丸と」、「むらの婚姻、万華鏡」、「落語と経済学の出合い」、「日本むかし話と経済学」等々；、調査のこぼれ話がおもしろい。

「落語と経済学の出合い」では、富くじを題材にした「宿屋の富」や「富久」あるいは「花見酒」などを例にあげ、経済学との共通点をあげている。著者はこれを、「隠し味の経済学」という表現を用いているが、落語のおもしろさも同時に味わえる。

サブタイトルの「地肥茄子大」というのは、もともと茶道の茶がけにある禅語で、大きな茄子を穫るためには、まず土づくりからというように、学問や研究にも一脈通うものがあるということ副題としたようだ。

法政大学出版局

▼ジョージ・ケナン／左近毅訳

『シベリアと流刑制度』全Ⅱ巻完結！

四六判・平均六五八頁／各巻五九七四円

▼一八八五年五月から翌年三月まで、酷暑、厳寒、悪路の大シベリア街道一万二千八百キロを走破し、帝政ロシアが地の果てに追いやった流刑者たちの惨状と肉声、シベリア大地の息吹、諸民族の生活と風俗を伝えて、国際的な反響を呼んだ十九世紀の旅記の白眉。

▼同行した画家フロストによる図版総数一九〇点、原著付録・索引に加え、網羅的なケナンの著作目録や関係文献目録、解題および本書の理解に資する付論四点を収めた世界初の完訳。



糸を紡ぐコサツク農民の女（本書より）

放送大学教育振興会

▼平成八年の新刊図書は七十六点。放送大学の第一学期の開設科目三百十八点に含まれ、科目登録をした学生たちの手元に届けられた。

▼新刊図書の履修科目の登録者数ベストテンは、①『英語Ⅰ』、②『カウンセリング』、③『精神分析学』、④『人格心理学』、⑤『発がんとその予防』、⑥『哲学入門』、⑦『プログラミングの基礎』、⑧『食物の特性とその役割』、⑨『情報基礎管理学』、⑩『母性の健康科学』である。

▼科目への関心の傾向は、学生が十八歳から九十一歳までの老若男女という幅広い層で構成されていることを反映してか、心理学と健康関連の科目に集まっている。ベストトエンティまで見てみると、心理学は前記の④と⑫『認知心理学』、⑬『学習心理学』の三科目、健康関連は前記の⑤・⑧・⑩と⑭『乳幼児の健康科学』、⑮『成人の健康科学』、⑯『老年期の健康科学』の六科目となっている。

▼引き続き平成九年刊行予定の図書七十六点、二百七十名にも及ぶ執筆陣は、取材、執筆、校正にと、大忙しである。

明星大学出版部

▼森下恭光・佐々井利夫共著『増補 道徳教育の研究』A5判 定価二〇六〇円
本書は大学の教職課程の中に設けられている「道徳教育の研究」という科目のテキストとして執筆されたものである。

▼本文構成 道徳教育の意義と必要性、道徳教育の可能性、発達観の道徳教育、明治以降の道徳教育の展開、子どもの生活と道徳、小・中学校における道徳の時間と指導法、付録として道徳教育のための手引書要綱、小学校・中学校学習指導要領。

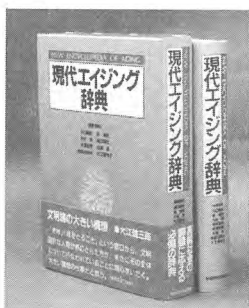
▼福島茂明・森竹英世・菱山寛一郎共著『社会科学教育の本質を探る―理論と実践の結合―』本書は、五章と資料編で構成されている。社会科学の教材、「新しい学力観」と社会科学、国際化・情報化に対応する社会科学とは何かについて、社会科学教育の事例をふんだんに取り入れながら社会科学教育の本質を明らかにしている。

▼野口京子著『性格心理学』現在進行中の本書は、性格心理の概説書として執筆された。学説の紹介とともに、自ら性格を知り、性格の成長と変化について焦点をあてて書かれている。

早稲田大学出版部

▼政治思想研究叢書⑥「モンテスキューの政治理論―自由の歴史的位相―」（押村高、三八〇〇円）を刊行した。健全かつ自由な政治の実現を追求したモンテスキュー。歴史・風土・法などの構造連関を中心に、その現代的意義を検証する。

▼『現代エイジング辞典』（浜口晴彦編集代表、八五〇〇円）は、エイジング（加齢）をキーワードに、医療・介護・年金をはじめ現代の緊急課題に 대응する画期的な辞典。医学・生理学・心理学・社会科学・福祉・看護等のエキスパート一九名が書き下ろした二二二項目を収録する。付録として「エイジング関連法」「エイジング年表」を掲げ、高齢者を取り巻く法的環境と高齢化の推移を俯瞰する。事項・人名・欧文索引を完備。



名古屋大学出版会

▼佐々木英昭編『異文化への視線―新しい比較文学のために―』（定価二六七八円）〈他者〉への視線に潜む西洋（男性）中心主義を現代の知で脱構築。国境に囚われずに生きるための文学・文化論。

▼吉田城著『神経症者のいる文学―バルザックからブルーストまで―』（定価三六〇五円）一体なぜ神経症なのか。そもそもどのように捉えられてきたのか。当時の医学的言説を参照点に作品を読解。

▼G・フライターク／井口省吾訳『ドイツ社会文化史』（定価五一五〇円）民族移動期以後のドイツ民族の歴史をその心性にまで踏み込んで描き切ったアナール派以前のアナール派的名著。

▼神野慧一郎著『モラル・サイエンスの形成―ヒューム哲学の基本構造―』（定価六一八〇円）ヒュームの主著『人間本性論』全巻を対象に、当時の政治・社会・思想状況をも射程に入れて全体像を描く。

▼松嶋敦茂著『現代経済学史1870～1970―競争的パラダイムの展開―』（定価三九一四円）限界革命から現代まで百年の学史を競争的パラダイムの成長進化過程として、多義的進化的に描く。

京都大学学術出版会

▼『中國書史』石川九揚著

書の歴史と文明の歴史が一体である中国において、「書之美」という観点に眼を据え、甲骨文から現代までの書と書史の構造を明らかにするものである。構成は、総論・本論・結論の三部からなる。まず総論で、書之美とは一体何であるかという問題提起のあとに、書が歴史とともに変化していくさまが描かれる。ここでは中国書史の流れをつかむことができ。次に、1〜45章の本論において、誕生から三千余年の書の歩みが個別に細部にわたり解析される。王羲之、歐陽詢、顔真卿等々の書が図録とともに、書史の精密な断面図のように視覚化されていく。そして結論では、書からみた中国史の新たな時代区分の試みと、日中の書の比較のなかでひととかれた日本文化・文明論までが考究される。筆・蝕、書の劇、書家・書論家である著者は数百におよぶ自ら造った言葉を駆使しながら書の本質の内部構造を、理論・行為・技法の極限まで辿っていく。そして、書之美と構造の深き世界にわれわれを引き込んでいく。(A4変型/四七〇頁/一〇〇〇〇円)

大阪経済法科大学出版部

▼『ファシズムの理論と實際』北島平一郎著作集第二巻(定価三七〇八円)

戦後五〇年の時を経て、あの憑かれたような暴力の時代を語り尽くすには至っていない。その悪しき遺産相続人や新しき後継者たちが、世界や日本の地においても健在であることは言わずもがな。本書は、ファシズムの歴史的考察と理論分析を試みた著者多年の研究成果をまとめた力作。▼本多淳亮著『企業社会と労働者』(定価一九六〇円)大きく変貌しつつある日本の企業社会及び労使関係を、労働者の生活面から分析したもの。終身雇用制や年功序列制の解体、それに伴う配転、出向、転勤の多発や、パート労働、女性雇用問題、規制緩和や家族生活の変動等、群発する問題に斬り込む。▼林直道著『JAPANANESE ECONOMY TODAY』日本の現状と問題点を英文でコンパクトにまとめ、日本経済に対する海外の理解の一助を目的とした。戦後五〇年の日本経済の歩みを概括しつつ、その大きな転換点を示唆。急速な経済成長を可能にした諸要因の分析。高齢化社会到来の必然性と問題点。日本経済と東アジアの関係等。

関西大学出版部

▼関屋俊彦編『能面図』(定価三一〇〇円)

本書は、能楽の金春大夫家所蔵の能面九十面を淀藩の渡辺某が写し、それを再転写して乾坤二部に編集したものをカラーで再現。能面を面裏まで再現描写した史料は数少なく、もとは江戸時代以前の金春家の所蔵になる点でも価値は高い。丁寧な手書きの彩色が美しい。▼網干善教著『飛鳥の風土と歴史』(定価二三〇〇円)日本古代の都、飛鳥で育ち、考古学研究を志して飛鳥京跡や高松塚壁画古墳、マルコ山古墳などの発掘調査に従事してきた著者が、そのなかでどのようなことを考えてきたかという、いわば自分史の一コマである。四季の飛鳥、恩師への追憶、高松塚壁画古墳やマルコ山古墳、キトラ古墳の調査の契機、父母への感謝の気持ちなどを綴る。▼岡田明・三宅秀和著『鑄鉄の知られざる世界』(定価四五〇〇円)本書は、鑄造工学の根幹に係わる現象について言及しており、前半部では先駆者の解析結果を踏まえ、後半部では最新の機器分析から得られた情報をもとに著者らの考え方の妥当性とその実証過程を論じる。

九州大学出版会

▼原田溥編『統合ドイツの文化と社会』A5判二六六頁・二八八四円。統合ドイツの社会的、文化的な変容状況を具体的に複合的に解明することによって、現代社会における国家統合のあり方を展望する共同研究の成果。▼高哲男編『制度としての経済社会―世界のなかの日本―』A5判二二八頁・二二六六円。「あらゆる改革の試みや法律の改正などは、多かれ少なかれ「思考習慣」としての制度の變化である。その意味で、「現代日本経済の制度構造」の解明を試みた真のねらいは、現在の「制度改革」の方向性や方法を、できるだけ明確に浮き彫りするところにあった」(编者「はしがき」より)。

▼アジア太平洋センター研究叢書。「異なる文化理解」と「地方発展」の促進に主眼を置いて実施された第一期の三自主研究プロジェクトの研究成果を相次いで刊行。①小川雄平編著『タイの工業化と社会の変容』A5判一五〇頁・二八八四円。②丸山孝一編著『現代タイ農民生活誌』A5判二四二頁・三二九六円。③矢田俊文・朴仁編編著『国土構造の日韓比較研究』A5判四四六頁・五一五〇円。

流通経済大学出版会

本学の図書館には、『祭魚洞文庫』二万一、四四四点の書冊が所蔵されている。これらの書冊は、故渋沢敬三氏が高邁な見識に基づき永年にわたって蒐集された貴重な民俗資料で、日本通運株式会社の創立三十五周年記念事業の一環として本学に寄贈されたものである。

この中に、江戸時代後期の著名な農学者大藏永常の著作27点が含まれている。その主なものに、彼の処女作である「農家益」を始め「農具便利論」、「除蝗録」、「綿圃要務」、「広益国産考」などがある。永常は、農家経済の安定向上こそが一国(藩)の繁栄の基である、との思想から、これらの著作をおとして、当時の先進的農業技術と特用作物の栽培及び加工技術の普及に努めた。

幸い、本学が所蔵する永常の著書には、初版本も少なくないところから、広く斯学の研究者の利便に供すべく、シリーズとして復刻することを検討している。

なお、故渋沢敬三氏旧蔵の『祭魚洞文庫』は、本学のほか一部が文部省資料館と水産庁資料館とにそれぞれ所蔵されていることも併せて紹介しておきたい。

大阪大学出版会

▼英・欧文書の刊行のさい二つの問題点があった。言葉・文章のチェックを確実にできるかどうかと、外国での販売経路をどう確保するか。言葉に関しては著者にとりネイティブなので問題はなかったが、販路については走りながらということにして、今年度は二点刊行を決定。まず仏文書が4月下旬にできた。アニエス・ディソン著『POUR UNE APPROCHE COMMUNICATIVE DANS L'ENSEIGNEMENT DU FRANÇAIS AU JAPON―Bilan et propositions』菊判・二四〇頁・定価三二九六円。邦題「日本人のためのフランス語教育法―実践と提言」。著者は本学文学部外国人教師。仏語教育現場のひと必読の研究書。

▼川久保勝夫・宮西正宜編『現代数学序説・I』A5・予価二六七八円。受験数学にはない現代数学の面白さを高校生・非数学系大学生・社会人向きに概観。

▼基礎工学部編『自然のしくみと人間の知恵―明日をひらくエンジニアリングサイエンス』B5変型・予価二八八四円。基礎科学と技術が渾然一体となって進展する姿をやさしく紹介する。

新刊案内 '96・4 5 '96・6

(表示価格は税込みです)

北海道大学図書刊行会

張謇と中国近代企業

近世蝦夷地農作物年表

ギフチョウ

エネルギー・3つの鍵―経済・技術・環境と2030年への展望―

《法と経済学》の法理論

中井 英基 一〇三〇〇円

山本 正編 二八八四円

渡辺 康之編著 二〇六〇〇円

荒川 泓 三九一四円

林田 清明 五五六二円

聖学院大学出版会

オリヴァー・クロムウェル 神の道具として生きる

澁谷 浩 一〇〇〇〇円

慶應義塾大学出版会 (旧慶應通信)

文章理解の方法

子どものこころ―その成り立ちをたどる―

小倉 清 二四〇〇〇円

浜田 文雅 二二〇〇〇円

20世紀を問う―革命と情念のエクソール―

F・フュレ他/大宅由里子・神吉尚男・奈良和重訳 二八〇〇〇円

視覚障害教育に携わる方のために 香川 邦生 二八〇〇〇円

青年ヘーゲルの思索―弁証法の成立過程― 渋谷 勝久 二八〇〇〇円

ヨーロッパ近代政治社会思想史 多田 真鋤 三〇〇〇〇円

HUMAN RESOURCE MANAGEMENT IN JAPAN 佐野 陽子 一〇〇〇〇円

21世紀、中小企業はどうなるか―中小企業研究の新しいパラダイム―

刑事法講義ノート (第2版)

園田寿・井田良・加藤克佳 二九〇〇円

詩の真実とことば―七人の詩人たち― 高野 守正 二九〇〇円

法律学における体系思考と体系概念―価値判断法学とトピック法学の懸け橋―慶應義塾大学法学研究会叢書63

CIW・カナリス著/木村弘之亮代表訳 四二二〇円

内部者取引の研究―慶應義塾大学法学研究会叢書64― 並木 和夫 三七〇八円

THE METHODOLOGICAL FOUNDATIONS OF THE STUDY OF POLITICS

〈慶應義塾大学法学研究会叢書65〉 根岸 毅 三〇九〇円

正論自由 第12巻―日本及び日本人― 中村 勝範 二二〇〇〇円

産能大学出版部

今の自分を発見すれば仕事革新ができる

ペンション経営入門 産能大学経営開発研究本部編 二〇〇〇円

新訂・経営の行動指針 土光敏夫著 草柳 鉄雄 一八〇〇〇円

「年中無休・24時間サービス精神」でオーナー人生をめざせ! 本郷孝信編 一六〇〇〇円

自然体(あるがまま)に生きようよ 田中 真澄 一五〇〇〇円

マルチカルチャー・マネジャー 牛込 覚心 一五〇〇〇円

F・エラシマウイ、P・ハリス共著/寺本義也監訳 二二〇〇〇円

財務がわかれば株価がわかる 嶋田 浩至 一六〇〇〇円

佐藤 芳雄編 二二〇〇〇円

リーダーシップとは何か!

R・A・ハイフエッツ著／幸田シャーミン訳 二八〇〇円

パラダイムの予言

谷口 正和 一六〇〇円

「もてなし上手」になれる本

斉藤千江子 一五〇〇円

99・9%不良債権を発生させない販売法

中井 久史 一六〇〇円

経営効果性追求のための業務改革

尾嶋繁／アイシン精機(株)共著 二〇〇〇円

尾嶋繁／アイシン精機(株)共著

水尾 順一 一六〇〇円

お客が買いたくなる売場・陳列

水尾 順一 一六〇〇円

■専修大学出版局

かれらはなぜ犯罪を犯したか―8人の鑑定ノートと危機理論―

森 武夫 一三六九円

「風と共に去りぬ」の女たち―ミッチェルの生き方とアメリカ南部―

大島 良行 二五七五円

■玉川大学出版部

朗読劇台本集1

岡田 陽編 二八八四円

朗読劇台本集2

岡田 陽編 二八八四円

朗読劇台本集3

岡田 陽編 二八八四円

社会科学における比較の方法―比較文化論の基礎―

N・J・スメルサー／山中弘訳 五九七四円

メロディーにピアノ伴奏を―ドミソの和音からはじめよう―

N・J・スメルサー／山中弘訳 五九七四円

旅に学ぶ

N・J・スメルサー／山中弘訳 五九七四円

新版 学生消費者の時代―バークレイの丘から―

N・J・スメルサー／山中弘訳 五九七四円

大学教授職の国際比較

N・J・スメルサー／山中弘訳 五九七四円

リベラルアーツ・カレッジの繁栄か、生き残りか、危機か―

N・J・スメルサー／山中弘訳 五九七四円

D・W・ブレネマン／宮田敏近訳 三二九六円

D・W・ブレネマン／宮田敏近訳 三二九六円

有本章・江原武一編著 四二〇〇円

有本章・江原武一編著 四二〇〇円

喜多村和之 二八八四円

喜多村和之 二八八四円

喜多村和之 二八八四円

喜多村和之 二八八四円

■中央大学出版部

現代人論

岡田 實 三五〇二円

初期イسلام国家の研究

嶋田 襄平 七二一〇円

教育訓練の日・独・韓比較

高橋由明編著 二九八七円

現代企業の支配とネットワーク―日本とアメリカ―

高田太久吉、B・ミンツ、M・シュワーツ編著 四三二六円

風習喜劇の変容―王政復古期からジェイン・

高田太久吉、B・ミンツ、M・シュワーツ編著 四三二六円

オースティンまで―

中央大学人文科学研究部編 二七八一円

演劇の「近代」―近代劇の成立と展開―

中央大学人文科学研究部編 二七八一円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

現代ヨーロッパ文学の動向―中心と周縁―

中央大学人文科学研究部編 五五六二円

北欧のアイデンティティへ北欧社会の基層と構造③

K・ハストロプ編／熊野聰・菅原邦城・田辺欧・清水育男訳

三〇九〇円

三六〇五円

大気電気学
現代政党の理論〈現代の政治学シリーズ6〉

北川信一郎
白鳥令・砂田一郎編

三七〇八円

プラנקトンの分布〈生物海洋学1〉

高橋正征・古谷研・石丸隆監訳

二四七二円

粒状物質の一次生成〈生物海洋学2〉

高橋正征・古谷研・石丸隆監訳

二四七二円

動物プランクトン／生物サイクル〈生物海洋学3〉

高橋正征・古谷研・石丸隆監訳

二〇六〇円

ベントス〈生物海洋学4〉

高橋正征・古谷研・石丸隆監訳

二四七二円

現実問題への生物海洋学の応用〈生物海洋学5〉

高橋正征・古谷研・石丸隆監訳

二四七二円

■東京大学出版会
知のモラル
講座世界史10 第三世界の挑戦―独立後の苦惱―

小林康夫・船曳建夫編
歴史学研究会編

一五四五円
二四七二円

教育心理学I 発達と学習指導の心理学
文学の方法
現代法の透視図
経済システムの比較制度分析

大村彰道編
川本皓嗣・小林康夫編
村上 淳一

二二六六円
二二六六円
三〇九〇円

青木昌彦・奥野(藤原)正寛編著
吉川弘之著者代表

三二九六円
二四七二円

くすり〈東京大学公開講座62〉
政策の総合と権力―日本政治の戦前と戦後―御厨 貴
Health Economics of Japan - Patients, Doctors, and Hospitals Under a Universal Health Insurance System—

二四七二円
五一五〇円

Aki Yoshikawa/Jayanta Bhattacharya/William Vogt

枢密院会議事録91・昭和篇49 国立公文書館所蔵

五三五六円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇75
国立国会図書館所蔵

一六四八〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇99
国立国会図書館所蔵

一三三九〇円

大日本史料 第五編之十一 東京大学史料編纂所編

一七五一〇円

大日本史料 第十二編之十一 東京大学史料編纂所編

一五四五〇円

学び合う共同体〈シリーズ学びと文化6〉
佐伯胖・藤田英典・佐藤学編集

一五四五〇円

講座世界史11 岐路に立つ現代世界―混沌を恐れるな―
アッラーのヨーロッパ―移民とイスラム復興―
〈中東イスラム世界8〉

一八五四円
二四七二円

開国経験の思想史―兆民と時代精神―
ヴェーバー『経済と社会』の再構成―トルソの頭―

宮村 治雄
折原 浩

二八八四円
六六九五円

安定同位体地球化学
シダ植物の自然史
〔井上毅伝 外篇〕近代日本法制史料集(第十七)

酒井均・松久幸敬
岩槻 邦男

六六九五円
三五〇二円

―ピゴット答議他― 國學院大学日本文化研究所編
枢密院会議事録92・昭和篇50 国立公文書館所蔵

五一五〇円
二六四八〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇76
国立国会図書館所蔵

二六四八〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇101・102
国立国会図書館所蔵

一三三九〇円

大日本史料 第五編之十一 東京大学史料編纂所編

一七五一〇円

大日本史料 第十二編之十一 東京大学史料編纂所編
講座現代居住1 歴史と思想 大本圭野・戒能通厚編

一五四五〇円
一五四五〇円
三九一四円

民法Ⅲ―債権総論・担保物権―
国際機構論
内田 貴 三六〇五円
最上 敏樹 二八八四円

公職追放―三大政治パージの研究―
日本の企業システム
増田 弘 四九四四円
アメリカ知識人の思想―ニューヨーク社会学者の群像―
伊藤秀史編 三九一四円

中国近世における礼の言説
心は遺伝子をこえるか
文化の自然誌
矢澤修次郎 三五〇二円
小島 毅 四七三三八円
木下清一郎 二四七二円
煎本 孝 二四七二円

小説というオブリガート―ミラン・クンデラを読む―
工藤 庸子 二九八七円

子どもの視点から見た空間的世界
―自己中心性を越えて―
鈴木 忠 四二二〇円

墓を生きる人々
―マダガスカル、シハナカにおける社会的実践―
森山 工 五九七四円

枢密院会議事録93・昭和篇51 国立公文書館所蔵 一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇77 国立国会図書館所蔵 一三三九〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇103・104 国立国会図書館所蔵 一七五一〇円

大日本史料 第五編之十三 東京大学史料編纂所編 一五四五〇円
大日本史料 第十二編之十三 東京大学史料編纂所編 一五四五〇円

■東京電機大学出版局
改訂電波法規(2陸技1・2総通受験教室⑤)
幡野 憲正 二一六三円

システムアドミニストレータ試験問題集(合格精選240題)
荒川 幸式 一六四八円

新たな品質経営への挑戦―ISO9001に基づくQS9000―

電子計測(理工学講座)
高林 貞夫 三五〇二円
遺伝的プログラミング(情報科学セミナー)
小滝國雄・島田和信 二二六三円

無限―その哲学と数学―A・W・モア／石村多門訳 三五一〇円
伊庭 斉志 四四二九円

■東京農業大学出版会
雑学講座―地肥茄子大のはなし―
竹中久二雄 二七〇〇円

■法政大学出版局
中国とキリスト教―最初の対決―
J・ジェルネ／鎌田博夫訳 四四二九円

シベリアと流刑制度 I・II
G・ケナン／左近毅訳 I・II各五九七四円
M・ハリスン／藤森和子訳 三三九九円

こどもの歴史
始まりの喪失―点と線に関する省察―
B・シュトラウス／青木隆嘉訳 二二六六円

実存の発見―フッサールとハイデッガーと共に―
E・レヴィナス／佐藤・小川・三谷・河合訳 五四五九円

福祉国家と市民権―法社会学的アプローチ―
I・II
I・II各五九七四円
M・ハリスン／藤森和子訳 三三九九円

ゲーテ時代の生活と日常
P・ラーンシュタイン／上西川原章訳 八四四六円
伊藤 周平 二九八七円

指導者が倒れた時
J・M・ポスト&R・S・ロビンズ／佐藤佐智子訳 二九八七円
イングリッド18世紀の社会
R・ポーター／目羅公和訳 六九〇一円

哲学的認識のために
G・I・G・グランジェ／植木哲也訳 三九一四円
パン(へもの)と人間の文化史(80)
安達 巖 二二六九円

法の現象学 A・コジエヴ／今村仁司・堅田研一訳 八四九八円
初期のジャズーその根源と音楽的發展ー

G・シュラー／湯川新訳 五九七四円

中世九州地域史料の研究 川添 昭二 七五一九円

マルクス主義と人類学

M・ブロック／山内昶・山内彰訳 二八八四円

重 合 C・ベネ&G・ドゥルーズ／江口修訳 二〇六〇円

他者のような自己自身 P・リクール／久米博訳 六四八九円

歴史を変えた病

F・F・カートライト／倉俣トーマス旭・小林武夫訳 二九八七円

正も否も縦横にー科学と神話の相互批判ー

H・アトラン／寺田光徳訳 六九〇一円

戯曲集 女をやめた！

黒川 欣映 三八一一円

明治日本とイギリスー出会い・技術移転・ネットワークの形成ー

O・チェックランド／杉山忠平・玉置紀夫訳 四四二九円

オリエント漂泊ーヘスター・スタノップの生涯ー

J・ハズリップ／田隅恒生訳 三九一四円

両性具有ーバルザック『サラジヌ』をめぐるー

M・セール／及川夔訳 二四七二円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部

■早稲田大学出版部

官僚のエリート学ー「官の理論」を「民間の理論」に組み替えるー

片岡 寛光 二四〇〇円

現代エイジング辞典

浜口晴彦編集代表 八五〇〇円

政治思想研究叢書

6 モンテスキューの政治理論ー自由の歴史的位相ー

早稲田大学蔵資料影印叢書 洋学篇／第10回配本
第8巻 大槻玄沢集 V 杉本つとむ編 三〇〇〇円

■名古屋大学出版会

異文化への視線ー新しい比較文学のためにー

佐々木英昭編 二六七八円

国際社会学「第2版」ー国家を超える現象をどうとらえるかー

梶田孝道編 二八八四円

病態生理と看護学 堀場希次・沢田勤也・田嶋基男編 三九一四円

テキスト母性看護Ⅰ 後藤節子・足立恵子編 二八八四円

テキスト母性看護Ⅱ 後藤節子・足立恵子編 四四二九円

モラル・サイエンスの形成ーヒューム哲学の基本構造ー

神野慧一郎 六一八〇円

現代経済学史 1870-1970ー競合的パラダイムの展開ー

松嶋 敦茂 三九一四円

現代協同組合論ー21世紀への展望と課題ー

野原 敏雄 三六〇五円

世紀のはざまにてー医学徒の回想と展望ー

加藤 延夫 二五七五円

河川感潮域ーその自然と変貌ー

西條八束・奥田節夫編 四四二九円

神経症者のいる文学ーバルザックからブルーストまでー

吉田 城 三六〇五円

クローズアップ生理学ー理学療法士・作業療法士のためにー

伊藤文雄編 四二二〇円

ドイツ社会文化史 G・フライターク／井口省吾訳 五一五〇円

■京都大学学術出版会

アルケー 1996 (関西哲学会年報4) 関西哲学会編 一五〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

現代法講義 上巻

E.U.統合と英澳刑事訴訟法

ファッショリズムの理論と実際 (北島平一郎著作集 第二巻)

企業社会と労働者 北島平一郎 三七〇八円

本多 淳亮 一九六〇円

■関西大学出版部

日本の経済構造と部落産業—国際化の進展と中小企業の課題—

田中 充 一八〇〇円

乾 昌明 二〇〇〇円

網干 善教 二二〇〇円

小川 悟 四〇〇〇円

岡田明・三宅秀和 四五〇〇円

関屋俊彦編 三二〇〇〇円

■九州大学出版会

確率モデルの数理分析 児玉 正憲 六三六八円

—生産・在庫モデルと信頼性・待ち行列モデル—

生産・在庫管理システムの基礎 (経済工学シリーズ)

児玉 正憲 三七〇八円

中村 廣治 五四五九円

国土構造の日韓比較研究 (アジア太平洋センター研究叢書2)

矢田俊文・朴仁鎬編著 五一五〇円

英語の動詞—形とところ— (新訂版) 木下 浩利 三九一四円

社会のなかの数理—行列とベクトル入門— (新装版)

I・ブラッドリー、R・L・ミック/小林・三隅訳 三六〇五円

An Approach to Diseases 仁保喜之編 五六六五円

—Immunology, Hematology, Cancer—

SASによる経済分析入門

博多で学び博多で考える環境問題 (福岡大学公開講座)

アジアを知る、九州を知る (久留米大学公開講座8) 二四〇〇円

不完備情報の動的決定モデル (経済工学シリーズ・第2期) 小竹一彰編 二二六六円

統合ドイツの文化と社会 中井 達 二九八七円

制度としての経済社会—世界のなかの日本— 原田 溥編 二八八四円

平成不況とこれからの企業経営

高 哲男編 二二六六円

唐代財政史研究 (運輸編) (久留米大学経済叢書1) 大東和武司・谷口豊編 一八五四円

セイ法則体系 (久留米大学経済叢書2) 清水場 東 六一八〇円

—マルクス理論の性格とその現代経済学体系への位置づけ— 松尾 匡 三二九六円

■流通経済大学出版会

大阪大学出版会

POUR UNE APPROCHE COMMUNICATIVE DANS

L'ENSEIGNEMENT DU FRANÇAIS AU JAPON

— Bilan et propositions — A・ディン 三二九六円

時永 祥三 一八五四円

福岡大学公開講座委員会編 二四〇〇円

久留米大学公開講座8

二二六六円

二九八七円

二八八四円

二二六六円

一八五四円

六一八〇円

三二九六円

三二九六円

三二九六円

三二九六円

三二九六円

三二九六円

三二九六円

三二九六円

三二九六円

【前号より】「トータルな文化としての達成である書物」と書いた。だが、それは確固不動のものなのか。書物の形が読書の形をも規定するとしたら、読書のありかたもまた、ゆるぎなく完成されたものなのだろうか。イリイチによれば、そうではない。では、読書の原初の形とはいかなるものだったのか。

▼時は中世、所は修道院。ぶつぶつとぶやく声が聞こえる。おそらく、言葉は口から発せられることよって力を得るからであろう、修道士たちは音読しているのだ。視覚的に読むのではなく、「修道士にとって、読書とは肉體全体で携わる活動」（五七頁）だったのだ。

▼さらに、彼らの書物には目次はない、章番号もない、ましてや索引など、あるはずもない。目次を見て、面白そうなところを拾い読みするとか、索引から当面必要な記述を見つけ出すとか、そのような行為は「祈り」にはそぐわない。読み始めたただひたすらに、自らの発した言葉を囁みしめながら、前へ、

前へと進んでいく。読書は祈りであり、修行であり、ぶどう摘みにも似た労働であり、そして旅であった。

▼七世紀になって「黙読の『発見』（九三頁）があり、写本室に静寂をもたらす。十二世紀のなかばには、読書の形がさらに劇的に変化する。ABC順の配列（照合順番）の発明が、索引

●製作の現場から 14 B

そして読書は祈りに還る？

や図書目録を生み出す。同時に、見出しが付けられ、段落が生まれる。内容を要約した「序論」が登場する。「祈りとしての読書」から、「学問としての読書」が枝分かれする。

▼つまり、〈付加価値〉がどうのこうのという問題ではなく、書物には（そして読書には）本質的に二つの形があるのだ。「祈り、あるいは旅としての読書」

の系譜は、今日でいえば小説に引き継がれている。小説に索引はそぐわないし、本来、飛ばし読みすべきものでもない。これに対して、「学問としての読書」の対象、すなわちわれわれ

大学出版部が作っているような学術書は、右に要約した成り立ちからして、検索の効率を求めずにはいない。一口に書物の電子化といっても、具体的な形はそれぞれに違ってくるだろう。

▼前者は一見、従来の書物の形のままだ、長く生きのびるよう思われる。コンピュータが最も得意とする検索の機能も、インターネットのリンクの機能も必要としないからだ。だが、はたしてそうか？ いつの日か、ほとんどの書物が電子化されたとき、われわれの慣れ親しんだ紙の書籍は、中世の祈りの世界へ還るのだろうか？

▼中世の書物は輝いていた。透明感のある羊皮紙の上に、手書き文字とともに、びっしりと描き込まれた細密画が光を放つのである。ルネサンス絵画の光と、中世細密画の光の違いにつ

いては同書を読んでいただくとして、いずれにせよ修道士たちは、この光と自らの発する言葉を、全身で体感していたのだ。

▼何もヨーロッパに限ったことではない。天窓から射し込む一條の光が金箔を置いた仏像を照らし、香煙ゆらめく阿弥陀堂の中で僧侶たちの読経は、これまた人間のあらゆる感覚を駆使した読書である。そう、これはAudio Visualの世界に他ならない。マルチメディアと言い換えてもよい。「祈り、あるいは旅としての読書」もまた、学術書とは異なる意味で、電子化されても不思議はないだろう。

▼学術書の電子化は、われわれにとつて、より身近な問題である。また、おそらく、より近い将来の問題でもあるが、残念ながら紙数が尽きた。このテーマは次号の筆者に、宿題として引き継ぎたい。（マルチ坊主）

本欄へのご意見・ご感想がありましたら、<http://www.asahi-net.or.jp/HG2K-AKT/> 経由でお寄せ下さい。筆者に伝えます。

大学出版部協会加盟出版部一覽

| | |
|-------------------|--|
| 北海道大学図書刊行会 | 〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605 |
| 聖学院大学出版会 | 〒362 埼玉県上尾市戸崎1—1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324 |
| 慶應義塾大学出版会 (旧慶應通信) | 〒108 東京都港区三田2—19—30 TEL. 03-3451-3584 FAX. 03-3454-7029 |
| 産能大学出版部 | 〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-3717-4346 |
| 専修大学出版局 | 〒101 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4238 FAX. 03-3263-4239 |
| 玉川大学出版部 | 〒194 東京都町田市玉川学園6—1—1 TEL. 0427-39-8935 FAX. 0427-39-8940 |
| 中央大学出版部 | 〒192-03 東京都八王子市東中野742—1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354 |
| 東海大学出版会 | 〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2—28—4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870 |
| 東京大学出版会 | 〒113 東京都文京区本郷7—3—1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958 |
| 東京電機大学出版局 | 〒101 東京都千代田区神田錦町2—2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563 |
| 東京農業大学出版会 | 〒156 東京都世田谷区桜丘1—1—1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643 |
| 法政大学出版局 | 〒162 東京都新宿区市谷田町2—14—1 TEL. 03-5228-6271 FAX. 03-5228-6010 |
| 放送大学教育振興会 | 〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482 |
| 明星大学出版部 | 〒191 東京都日野市程久保2—1—1 TEL. 0425-91-9979 FAX. 0425-93-0192 |
| 早稲田大学出版部 | 〒169 東京都新宿区戸塚町1—103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406 |
| 名古屋大学出版会 | 〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697 |
| 京都大学学術出版会 | 〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6182 |
| 大阪経済法科大学出版部 | 〒581 大阪府八尾市楽音寺6—10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979 |
| 関西大学出版部 | 〒564 大阪府吹田市山手町3—3—35 TEL. 06-368-1121 FAX. 06-389-5162 |
| 九州大学出版会 | 〒812 福岡市東区箱崎7—1—146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172 |
| 流通経済大学出版会 (準会員) | 〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011 |
| 大阪大学出版会 (準会員) | 〒565 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX. 06-877-1614 |